野呂有子「『メイベルおばあちゃん』からの贈り物」『英語青年』1997 年 5 月号、pp. 38-39. .

「メイベルおばあちゃん」からの贈り物

野呂有子

Arleta Richardson（1923- ）作の *The Grandma's Attic Novels*〔邦訳「おばあちゃんの屋根裏部屋シリーズ」〕は全部で 10 巻。アメリカでは合計で 200 万部以上のベスト・セラーになった。とくに、第六作目の *Eighteen and on Her Own*（1986）〔改版後のタイトルは *A School of Her Own*〕A Christian Publishers Association（ECPA）からフィクション部門で The Golden Medallion Book Award を受賞している。

作者は大学教員、図書館員、小学校の教員等を経て、「メイベルおばあちゃん」のシリーズを書き始めたのは 45 歳を過ぎてからであった。74 歳の今もますます健筆で、現在も二冊の本を執筆中という便りをこの冬にいただいたばかりである。ふとしたきっかけから筆者はこのアメリカの現代キリスト教児童文学作家と手紙を交換するようになった。

この作品群では、リチャードソン女史の祖母、Mabel O'Dell [Williams] の少女時代から、娘時代、結婚し子供をもうけて家庭生活を営んでいく様子が語られている。先の『メイベルおばあちゃんは 18 歳』では主人公が、夢を実現させて教師となり、ミシガン州のノース・ブランチという村の学校で十五人の子供たちを相手に新米教師として奮闘する様子、そこで未来の夫となる牧師、Leonard Williams と出会って愛を育んでいく様子が生き生きと語られている。

「メイベルおばあちゃん」のシリーズを読んで、何より興味深いことの一つは、100 年ほど前のアメリカでキリスト教の素朴な教えが、ごく一般的な家庭の中でどのように生きていたか、どのようにして子供たちの生きる糧となっていたかが、さりげない日々の生活を通して我々に語られている点である。例えば、"When Grandma Needed Prayer"では、一日の始まりは、まず神への祈りからという姿勢を保ち続ける両親、それに対して自分の興味あることを優先させようとして失敗し、そこから学んでいく幼い主人公の姿などが、市の立つ日を舞台に描かれる。

少女時代から娘時代、結婚とその後の家庭生活を描いたシリーズといえば、すぐに思い浮かぶのは『赤毛のアン』や『大草原の少女ローラ』等である。それでは、「メイベルおばあちゃん」はこれらの古典的シリーズとどこが違うのであろうか。それはまず、なんといっても、現代に生きる作者自身の視点から、若き日の祖母の姿が描き出されているという点にある。母から娘へ、娘から孫娘へという、三代に渡る女性の知恵が結実をみているのである。メイベルおばあちゃんは幼かった作者と同居して、学校に上がるまえの作者に読書を教えた。そして、キリスト教信仰の基盤を与えた。この時期に祖母が語り聞かせた多くの物語が、のちの作品群のもとになったのである。

さらに、作中に登場するメイベルの幼馴染みであり、親友である Sarah Jane Clark との友情も見逃すことはできない。メイベルとセアラ・ジェーンは二人で一緒になって騒動を引き起こす。フラフープ事件、迷子騒動、美顔術騒動と枚挙にいとまがない。その中でも、とくに筆者に思い出深いのは、「子豚と赤ちゃんの取り替えっこ騒動」である。母親のところに赤ちゃんを連れたお客さまがやってくる。二人は赤ちゃんを乳母ぐるまに乗せて散歩しているが、そのうち赤ちゃんは眠ってしまう。つまらなくなった二人は赤ちゃんをメイベルのベッドに寝かせて、代わりに生まれたばかりの豚の赤ちゃん（色といい大きさといい手頃だった）を、本

当の赤ちゃんにみたてて人形の服を着せて乳母ぐるまに乗せて遊んでいる。やがて母親に苺摘みを頼まれた二人は豚の赤ちゃんをそのままにして森へ出かけるが、帰ってみると、事情を知らない大人たちは、誰かが赤ん坊をさらって、代わりに子豚を置いていったと思い、大騒ぎになっているのである。ここには、遊びに熱中し、後始末をせずに次の作業に移ってしまう子供の姿、一言が足らないために騒動を起こしてしまう子供の姿が余すことなく描かれている。

とはいえ、現実的でユーモア感覚あふれる、「竹馬の友」セアラ・ジェーンは、あれこれと迷いながら主人公とは絶妙のコンビを組んでいる。セアラ・ジェーンとの友情は二人がそれぞれ結婚し、家庭を持つようになっても変わることはない。二人は貴重な知恵を交換しあって助け合い、難局を乗り切っていくのである。この点も『赤毛のアン』や『大草原の少女ローラ』とは大きく異なる点である。アンやローラにも成長の各地点でそれぞれ親友はいた。しかし、それはやがて成熟した女性として生涯の伴侶を得るまでの、いわば練習台のようなものではなかったか。それぞれが結婚し、家庭を持つに至っては、女同士の友情はやがて遠いものとなってしまったのではないか。夫に付き従って移動した先々で女友達は出来ても、それはその時点時点でうつろっていくものではなかったか。(「心の友ダイアナ」もセアラ・ジェーンのまえでは、いささか影が薄くなると思えるのは筆者だけであろうか。)しかし、メイベルとセアラ・ジェーンの友情は違う。二人はともに教師になるという目標に向かって切磋琢磨し合い、ともに町の学校に通い、ともに教師となる。そして、家庭をもった後も、二人の友情に変わるところはないのである。成長の節目、節目で、就職、結婚、出産(流産)等、人生の重大事において、二人は励まし合い、助け合う。筆者は初め、このセアラ・ジェーンという登場人物は、リチャードソン女史のフィクションではないかと考えていた。それは、セアラ・ジェーンという人物が、今までの児童文学に登場する女の親友とは余りにもかけ離れたタイプだったからである。それが、実在の人物をモデルにしていると聞いて、ますます感慨を深くしたのであった。

「メイベルおばあちゃん」には、祖母から孫娘へという縦の時間軸での女性同士の連帯に加えて、セアラ・ジェーンという横の時間軸での女性同士の連帯が織り合わされているのである。この縦軸と横軸の連帯は、夫との家庭生活を何ら侵食することのない、それどころか、それぞれの家庭生活を一層味わい深いものとするのに大きな働きをしているのである。そして、読者である我々に、人間にとって同性との友情は、異性との交わり(結婚)と同様に大切なものである、というごく当たり前の、しかしきわめて重要なメッセージを伝えている。この点こそ、「メイベルおばあちゃん」を、『赤毛のアン』や『大草原の少女ローラ』とは決定的に違う、独自な作品群にしている特質ではないだろうか。

もう一点は、書かれている英語の新しさ、平易さにある。『赤毛のアン』や『大草原の少女ローラ』の英語も確かに素晴らしい、読むたびに新鮮で味わい深く、美しい英語である。しかし残念ながら、それが現代の英語の会話としてそのまま使えるか、と問われればいささか疑問が残る。それはやはり、書かれた時代の英語なのである。この点で現代のアメリカに生きる作者の口を通して 100 年前の世界が再現されているというのは大きな強みである。そこで使用されている英語は「現代の英語」なのである。しかも、学生生活を送る主人公たちの交わす会話や、考えていることの中にはそのまま、英語を学ぶ日本の学生が使えそうなものが数多く含まれている。筆者は大学の授業でこの作品群を学生と一緒に読んでいるが、それはこの作品群が「英語で会話をしたい」という現代の学生のニーズに十分答えうるものだという確信に基づいてのことである。

第三の特質として、メイベルの家庭環境が三人兄妹の末っ子、上二人は兄という具合に設定されていることがあげられよう。ちなみにアンは孤児で農場を営む兄妹の家庭へもらわれてきた少女であったし、ローラは三人姉妹の二番目である。「メイベルおばあちゃん」のシリーズにおいては、主人公と兄二人の関わり合いが実に生き生きと描かれている。待望の女の子として生まれ、兄たちから見れば「甘やかされて」育てられた主人公の「しでかす」ことを、ReubenとRoyは、はらはらと呆れ顔で見ている。そして「生意気な妹」を「かまい、からかう」のである。この点が、男性の読者たちにも「メイベルおばあちゃん」のシリーズが身近なものとして受け入れられている秘密であろう。実際我が家でも、次女にこの物語を読み聞かせているとき、そばで四歳年上の長男が耳をそばだてているということを何度か経験した。それは、ちょうど主人公が兄弟喧嘩をしているシーン・兄弟間の思いやりを示しているシーンが多かったように思われる。

第四に、実際のメイベルの学校生活・授業風景がありありと丁寧に描かれている点が特質としてあげられよう。これは、やはり作者リチャードソン女史自身も長年、教壇に立って教えた経験があるという事実に裏打ちされているのではないか。祖母自身の学校生活・授業風景を描きながら、それが現代に読者にも興味深く手に取るように理解できるのは、作者自身の生徒への配慮・工夫・愛情が行間に流れているからに他ならない。「メイベルおばあちゃん」を学生と一緒に読んでいることは既にふれたが、とくに教職を志望する学生がこれらのシーンに深い興味を示すのである。それはここに〈教育の原点〉が描き出されているからに他ならない。とくに印象深いのはノース・ブランチの村に赴任して「教育委員長」の家に寄宿することになった新米教師のメイベルが緊張しているのに対して、父親のいうことば—「おまえはいままでだってずっと教育委員長（父親）の家に住んでいたじゃないか。教育委員長といったって教育について関心を持っているふつうの人のことなんだよ」—である。ここには神の摂理を信じて、新しい共同体を切り開き、自分たちの手で自分の子供たちに理想の教育を与えようと学校を作り、教師を選んだ、若きアメリカの、親たちの姿が凝縮されている。

「メイベルおばあちゃん」のシリーズは NHK ラジオ放送での朗読も予定されているという。リチャードソン女史は、どこか少女の面影を残した、車椅子に乗った、ユーモア溢れる老婦人である。この春、「日本の読者に会うために」来日を予定しているとの知らせを受け取ったのは、つい先頃のことである。以前から来日を検討していた彼女が、いよいよ本気になったのは日本の多くの読者たちからの「是非、来日してほしい」という希望を受けてのことであった。「メイベルおばあちゃん」の愛は、今、静かに我々、日本人の心に働きかけ始めているのである。

※Arleta Richardson 氏来日　1997 年 4 月 19 日（土）午後 2～4 時 40 分　世田谷文学館で、来日記念トーク＆サイン会「児童文学のつどい」が開催される。講師：アリータ・リチャードソン、中村妙子。1997 年 4 月 21 日（月）図書館流通センターで開催される（詳細未定）。 1997 年 4 月 24 日（木）午後 2－4 時、大阪府立国際児童文学館講座で「児童文学国際講演会」が開催される。講師：アリータ・リチャードソン「メイベルおばあちゃんと私」、中村妙子「翻訳について思うこと」。費用、問合先等省略。